

鈴木 寛 (兵庫教育大学教授)

## 音の迷信 (3) 持続音と減衰音 中編

「ボン・ボン」という表現で代表されるピアノ音は典型的な減衰音です。時間軸に沿って次々と鳴らされるピアノの音は音域にもよりますが長くても7~8秒で聞こえないレベルにまで減衰します。しかし、我々の意識の中では鳴り続けています。この鳴り続ける意識の音のことを「内的聴覚」と呼び、音を音楽に変換するメカニズム(メタ認知とも言う)では不可欠なものです。ピアノはこの「内的聴覚」を誘導するあるいは誘発するという原理で音を音楽に変換します。

ジャズ・ピアノなどではアクセントやシンコペーションを表現するのに直接的な方法でリズム感を刺激します。この直接的刺激をインパクトと呼んだりします。MIDIデータではベロシティやデュレーションのデータだけでこれらの表現が可能ですが、受け取る側がそれを意識して捉えるのとそうでないのではかなり違ってきます。

この直接的な刺激だけで音や音楽を聴く場合はいわば「意識の要らない」聞き方で、内的聴覚を使って意識しながら聴く場合とでは音や音楽に対する活動がかなり違うのです。別の言い方をすれば「首から上」で聴く音楽と、「首から下」で聴く音楽があると云うことです。ピアノ曲などでは右手の旋律は「首から上」で認知されますが、左手の伴奏は「首から下」で感じられます。

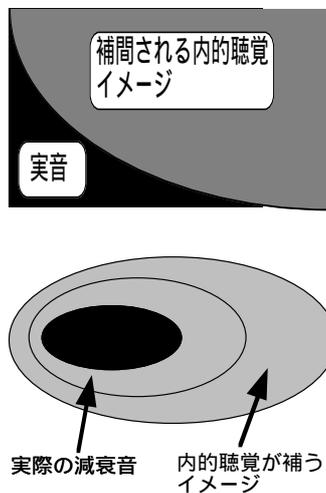
一概には言えませんが、伴奏は旋律のバックグラウンドですからあまり意識を刺激しすぎても旋律刺激が弱くなります。

優れた作曲家や演奏家たちはこの「何を意識に」「何を無意識に」という配分をうまくやります。そもそも減衰系の音はインパクト即ち衝撃的刺激ですから鼓膜や聴覚を占有している時間は短いのです。ですからインパクトの密度や強さで意識の部分と無意識の部分の両方の世界に存在できるのです。

この直接的刺激の最たる物は「打楽器」でしょう。持続

音の出る打楽器はありませんから減衰時間に若干の差はあれすべては消えゆく音です。これは別のところで触れますがすべての楽器音の音色の違いの殆どはアタックの数ミリ秒の高調波成分で決定されますので、打楽器ほど叩いた時の音が多様な楽器も少ないのです。カナで云うと「ボン」とか「カン」とか麻雀用語のようですが、語尾が「ン」になるという特徴があります。一般に「あ・え・い・お・う・」のような母音的なスペクトラムを持つ性質を「フォルマント」と呼び、例えばトランペットは「あ」、オーボエは「え」とかに近いのですが、打楽器ではそのフォルマントが識別できるほどの時間がなく、高調波が少なくなり減衰し始めた余韻の部分が「ン」と聞こえるのです。

この「ン」の部分で内的聴覚が働くのですが、次の図の網掛けの部分が「ン」の部分なのです。勿論この図は概念図ですから要は「実音」の外側に「虚音」が存在するような聞き方もあるということをご理解いただきたいのです。



インパクトとしての音でもお寺の鐘のように「ゴーン」と「ン」までの減衰時間が長い場合は余韻の中に様々な思いやイメージを展開するでしょうが、鼓の音のように「ボン」と短いような場合は無音の沈黙を「間(ま)」と呼ぶイメージで補います。

このようにイメージで補う能力が音楽的能力と密接な関係がありますので、音楽的能力の低い人たちにとってピアノの音楽はかなり難解なのです。また、ロックやポップスの多くはパーカッションの助けで成り立っていますが、音楽を難しいと感じさせないインパクトのあるリズムセクションに合わせて身体を動かすだけでその音楽の世界に入り込めるのですから、漫画世代の若者にはうってつけなわけです。現代音楽の多くがこの減衰音の「イメージ自己生成機能」に頼っていることは経験的におわかりでしょう。

要するに内的聴覚は高等な精神活動であり、特に旋律線などの点を結んだ線としての認知は今日の発達したコンピュータでも不可能な世界なのです。